特42
2
443

西王母
道明古
經政
云乃
已

二

西王母や三皇五帝は昔より今迄
代々重おもきがゆゑなるべし
めでたき地 真に感えん日はてやく
早連 玄帝四海乃ことくゆるぎなし
廣き海めぐる 早キ 天のかやき地の
上ノ上 みちてみなの興をもとなく
中ヨリ

万天の出る星のごとくに百官相雲
客や千戸万戸のごとくに出でわた
ることなく門過ぎもかかることな
市をなす金銀珠玉をまきて発明
うやうやしくして日夜の勝劣なし
たりかたしいまだ見ぬ楽しび
もつぶるべし桃李物いまし給ふ

月一九

月一廿

面白や四季折々の時ごとに
花は国土の色を皆見せ給ふ花
乃至色がまるる法乃至門の心ぞ知る
時や至りぬ三千年に一度咲く
花ひとたびかさねてこそやいたや
君よりきしいさく君にさんを

堂へ入まつりそれより心あり後ゝ
ぶゝ駒ゝ法乃道ゝ乃外まつ
うゝとなき道ゝよりてゆらぎ
山寺場乃法ゝ
あれば
世乃ゝ
乃ゝ

長い三千年に
まつ
ぶゝ此君乃
ゆまつ
ゝ
西王母うゝ乃
ゝ

きそはさくらに花乃　桃李梅
つくは　去つぬる年月を　送り
むかへし　此春は　ちとせにちかき
て桃乃ことぶき咲く言葉に
あふぎそ唯君乃御恵あつ
き国土の千とせ種　桃花乃色そへて
ある　桃は不思議やたぐひの天津乙

女乃まひの姿をみるぞうつきぬる
影ひかりはさこそ露乃までやられ
の袖乃月のかげ雲のうへまでその
めぐるあゆみのきぬように
うれしき御代は舞人君が乃祝ひぬ
影は天上に　楽みこぞ
むかし年はふまじと限りもなき

隅なく洗い流して西の母乃方より
七夕祭りて花は宮もとにあらはなりと
実は天かつてあらうきをもて天にてよりたる
早上書
[illegible]作品伴乃舞ふ
て音楽は[illegible]乃天津風雲
乃通路をよく面白やかぐ
おもしせむ[illegible]

乃ぶ雀鳳凰が陵頻伽迦陵頻伽
聲にやどまるや独れ羽乃天津乃衣
なるしあまれ[illegible]
はりをおぼく乃中にをみえたるい
西の母乃を姿[illegible]
だりきむれ[illegible]
きぬてしたきぬ乃冠

きやうく春やうたる桃を志ちよ
このもとうつもしやもとを君ふりくるを
桃賀乃　花乃ふりかゝるをも
上月　花を志るしやさうつるよりぐゝすまり
ゆくそきをも曲水をもしらやこかきの水
うりたりまきをもうるだをやめて袖
をもをしたをたあれきをれしをく。雲の

花島春風和しかく雲路よりつき
きを毋を伊ひらるよ毎を伊日
元　なをや天弥乃ぜ元を志ちをを
里ひをを

道明寺

第一、[illegible]ばかりやく[illegible]仏殿寺

[illegible]間

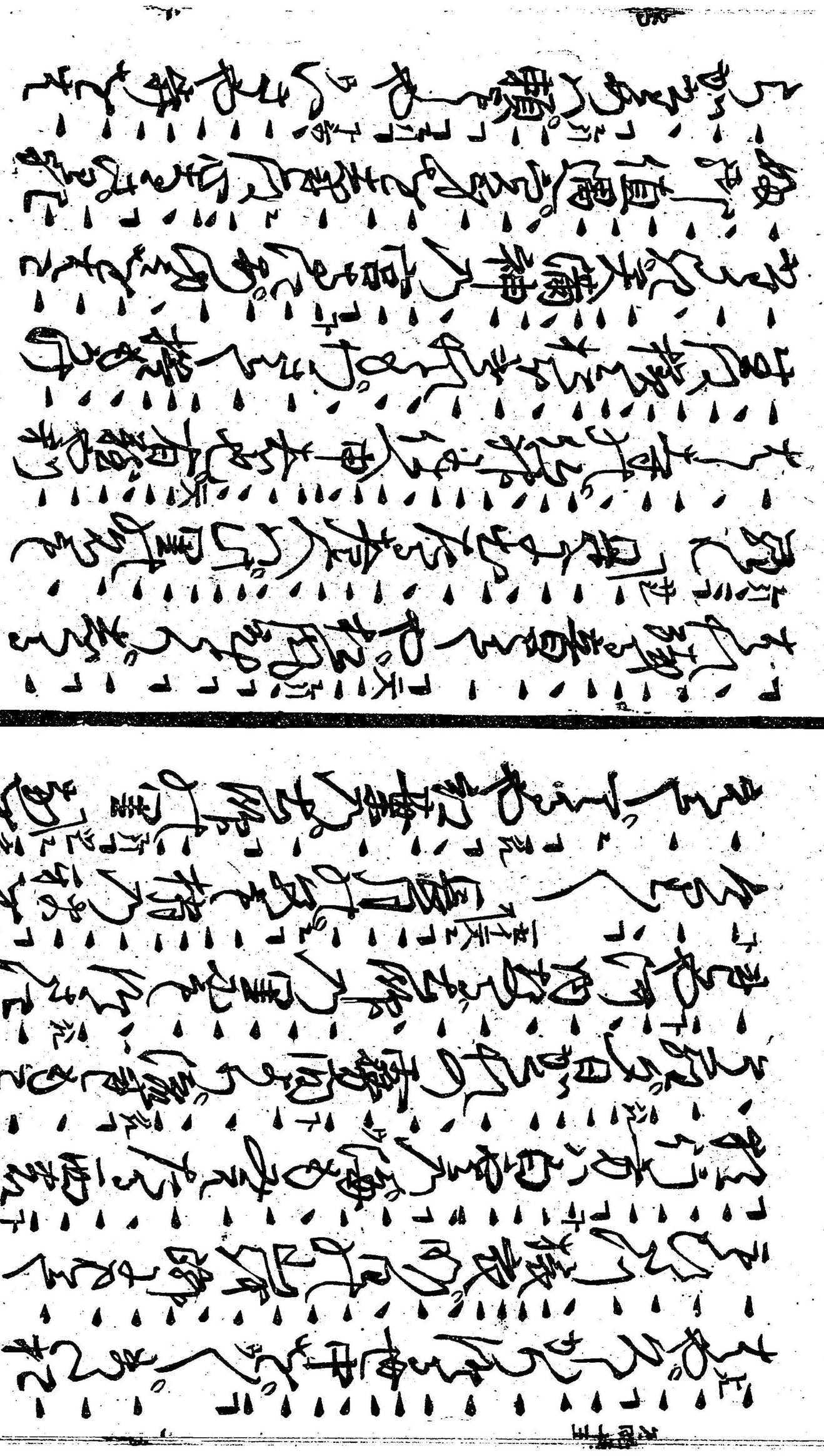
[illegible]加様[illegible]去い相撲国見[illegible]戸

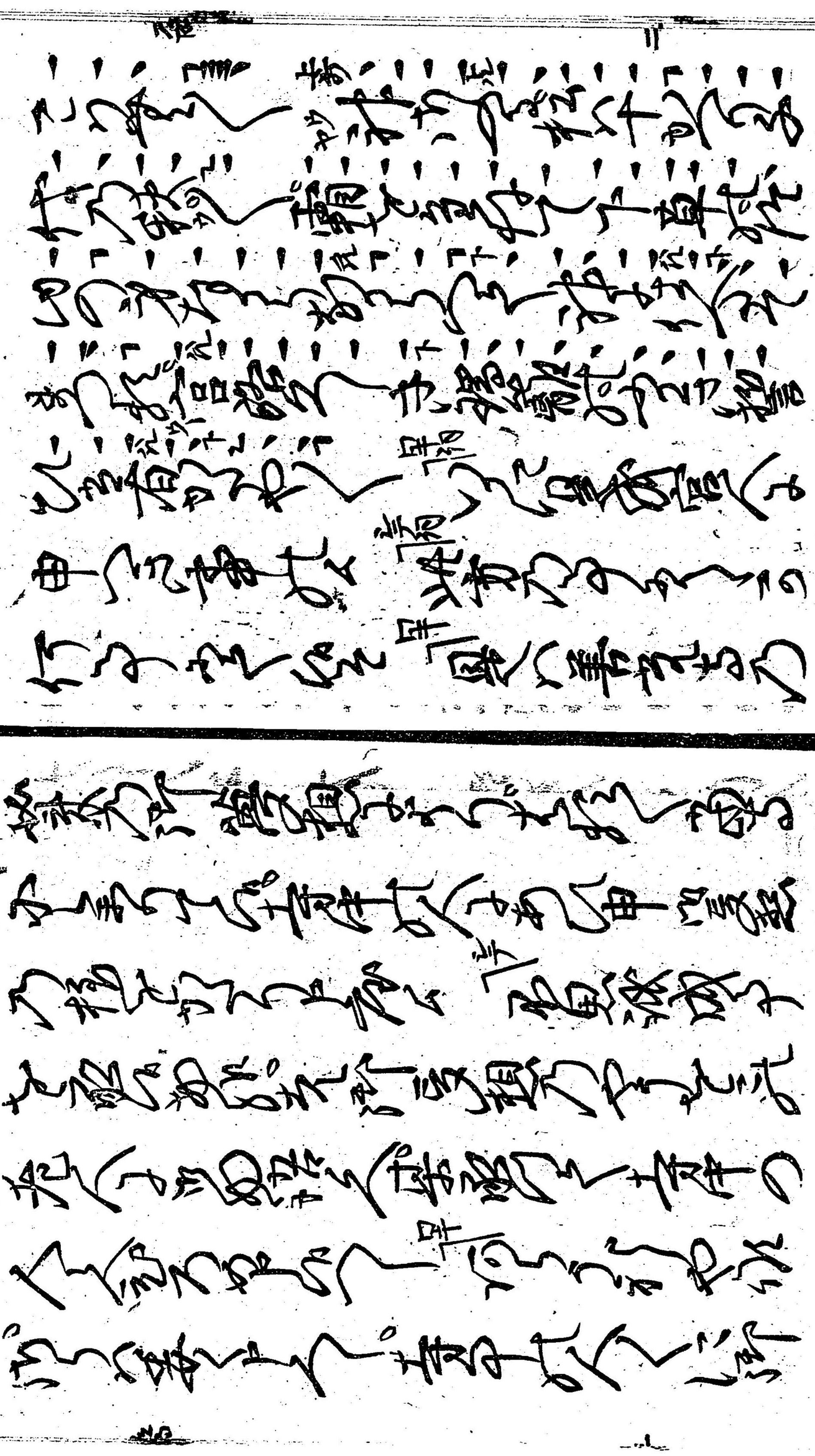
所[illegible]去[illegible]申去[illegible]我[illegible]光

寺代[illegible]寺[illegible]七百[illegible]ばかり[illegible]あり

[illegible]御霊[illegible]と[illegible]家[illegible]後[illegible]見より

行内[illegible]去[illegible]ばかりやと思[illegible]捨て



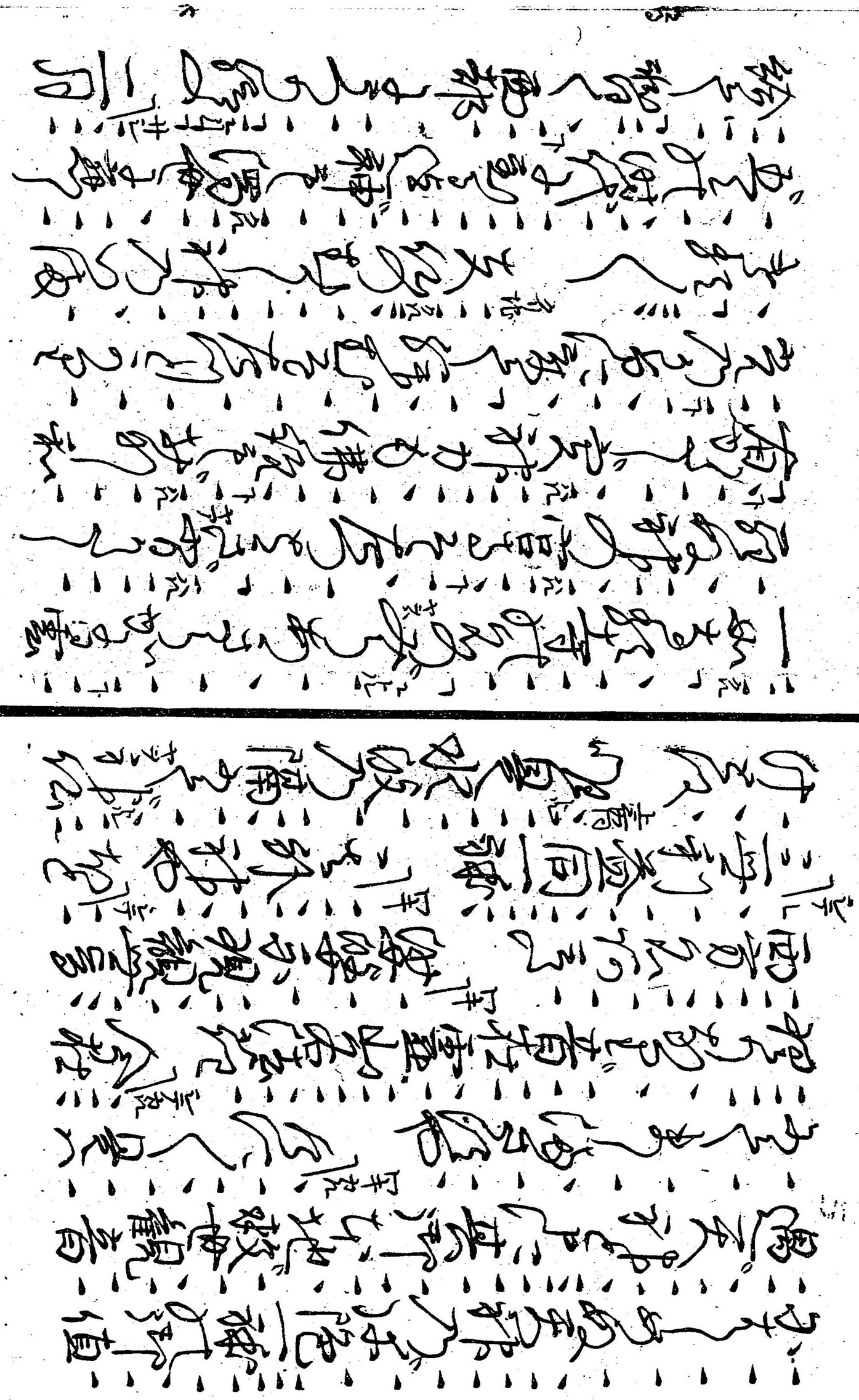


ひろめ給へ〈序〉御傳より〈早〉是より相模国
足柄下郡にてむかうと申聖人
てんの我念仏往生の志あるものらんは
みな信濃国善光寺へ参るべし十日よ
箱根の嶺を越行し此所をきらう
きかみ此衣をまうけ此袈裟をまゐらす
左信乃あらたなる御声なくば出会

仏往生の心ざし深く厚かりけるゆゑ
五ヶ所の何の国府寺もて天神の社
有なり紛はよ神明をあがめ奉る七社
乃神々まで勧請ありて又天神は
一切衆生現当二世の為ニ五部の大乗
経をも法養して埋まれけるを軸
より木株樹乃木まもたらさずまで

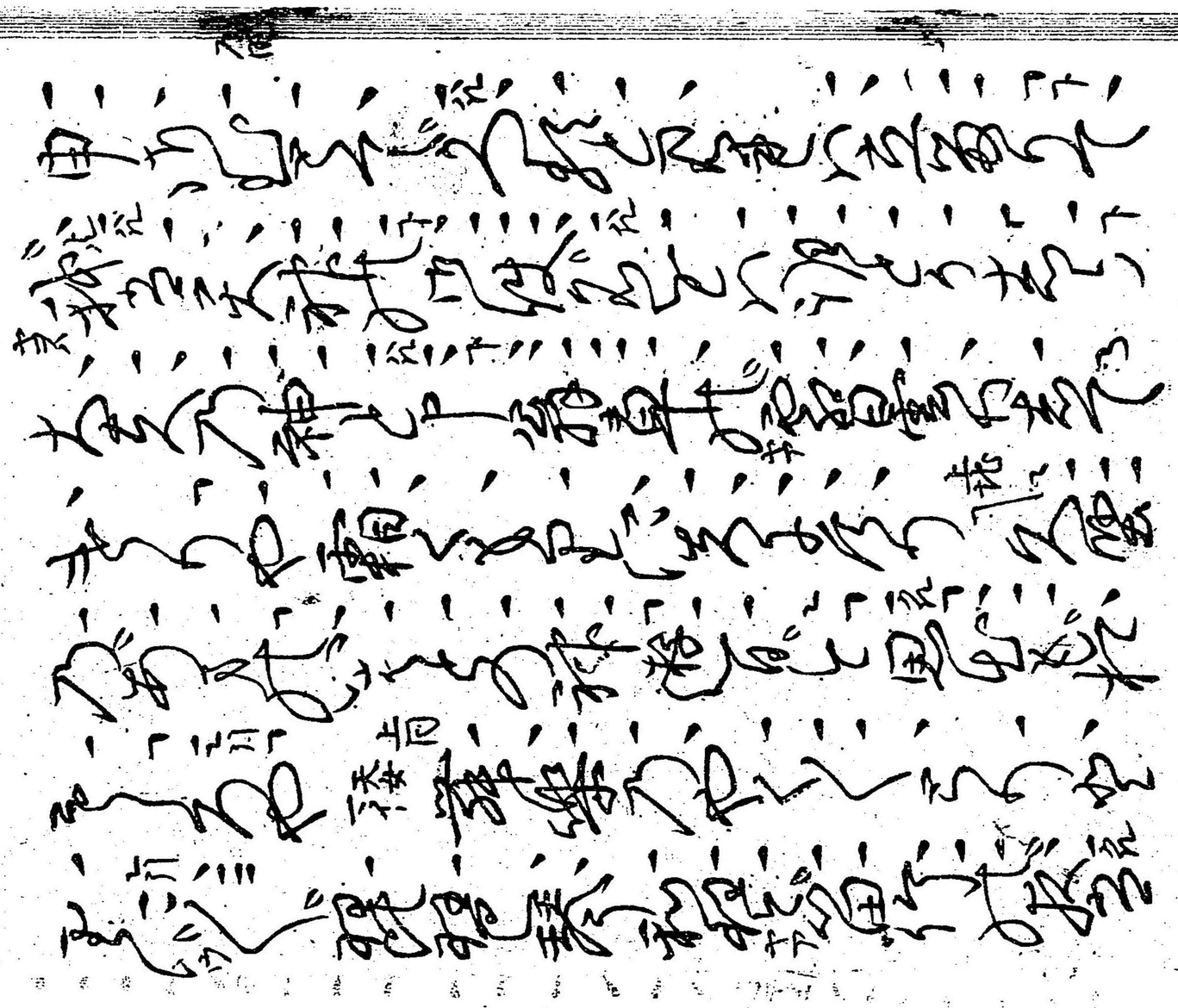
とゝ枝殊に人倫百万及ひ衆
僧生類ゆるまゝ長寿を願ひ
ねがひ奉り御長起ゝ
敬ひ種きゝ子孫ゝ繁ち伸
乃へ上まゝ申ゝ光明を仰
き穂木穂樹を申ゝ世界へ
祈願人ゝ御信申ゝ

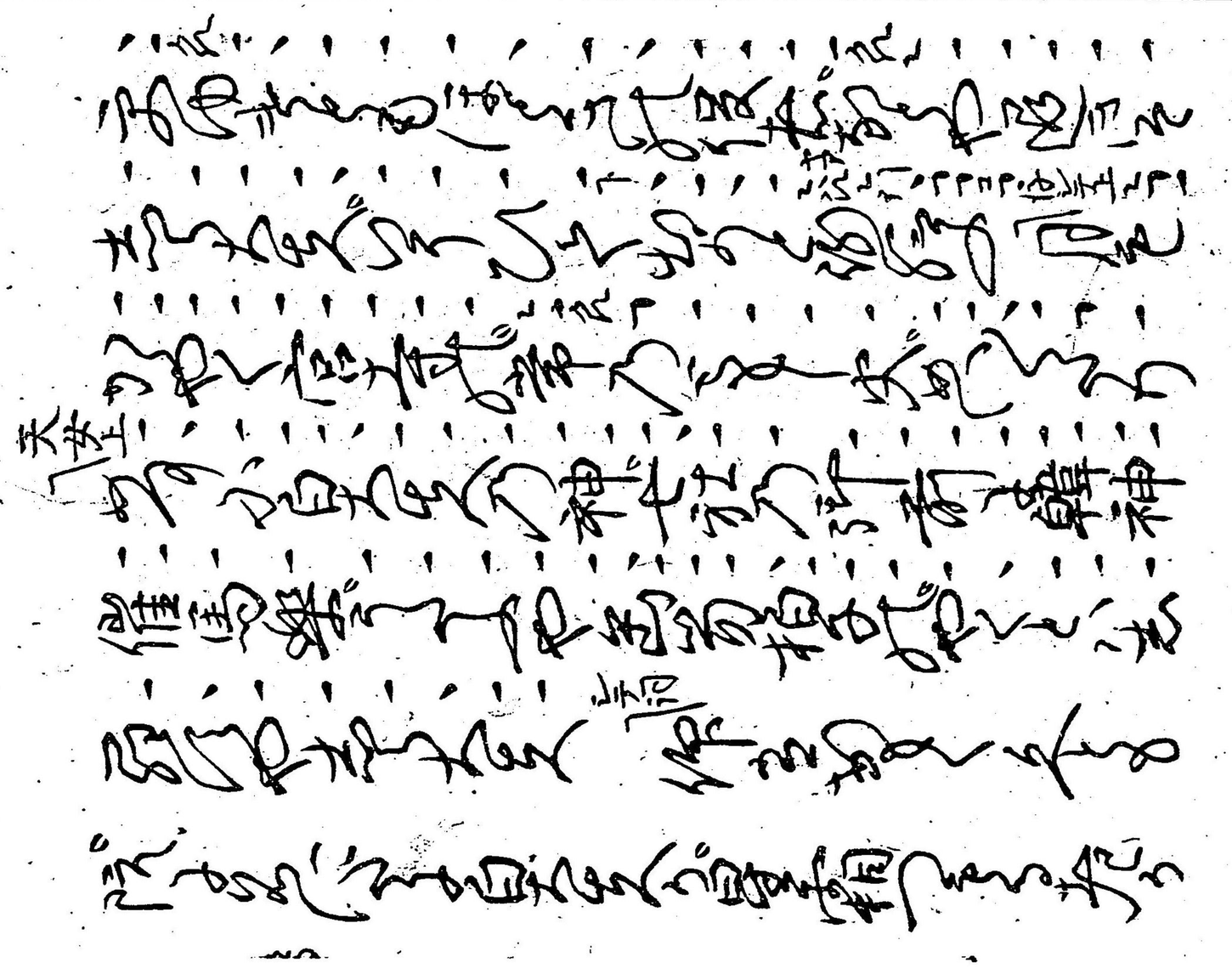
是に神ゝとゝ七社神ゝ
とゝ枝殊に人倫の成天神ゝ
世界へまゝ上たゝ社ゝ御ゝ
ゝ穂木穂樹ゝ作種ゝ拾ゝ
御有種ゝ神ゝ伝ゝ同種ゝ上せ
ゝ天神ゝ意乃御結願ゝ
て願ゝ上たゝ要乃作ゝ祭



下は五月雨にやつれて都を出でし時
古郷の里の猿宿のもとに立ち寄り神
社の値遇の所結縁とこ
ろたのもしき角とも思ふ道
の人の露の恵みつかう君
を思ひ宿の精をけがしたるかとも
のうらやめり涙ぬぐふ袖
なかりせば誰か見ん梅の花
を折りかざしたる
ものを思ひ出でぬ猿の声
ばかりぞ忘れがたき
天門鄙の国にて
うらやましかりし都
乃鐘の音聞くたびに
袖の露を打ちはらひ
秋の夜の月
をながめて三四日
滞り

蘭の花は皆夏の花なれば彼蘭を
初とし給ふ事は如何なるや日は北
斗の星なれば北斗の星を
祭りて国土を安穏ならしむる
耶神感あらんか
ばかりなれば北斗の星を祭りて
天満陽感をめでたくなるべ
種々なる宝香
皆仏の





君代やくらゐよろこびつ いやとよ
こゝ侭宮りたゞしき侭をあらき
なり 梅を辞とる吟よまし梅その
やいうかんりいきう 庭火は
けや あまた玉垣 うやろその
中く 白妙の恩の袖をかさねや
笏拍子とゝのへてかるる声の催

乃声をきくあまたのほとりに笏拍子を
打ならしや舞楽を奏で鳳凰舞を
の曲 七徳のおさまる七拍子 膝を
座して舞ひおさまりておさまる
魔縁をはらひたまふ手には寿福を
まねき千秋楽は民をなで 万歳
楽には命をのぶる法の延ておさまる

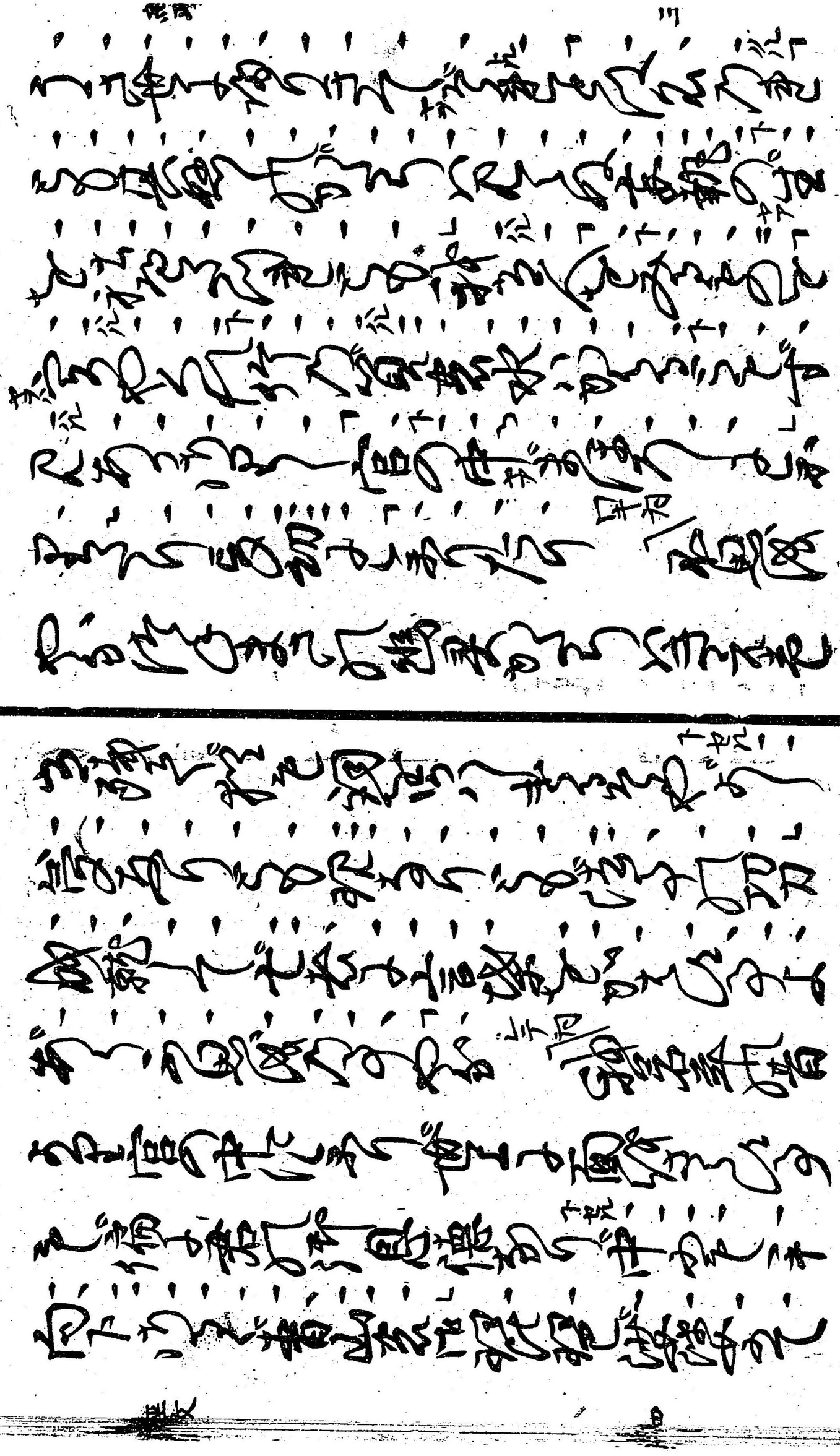
乃枕を敷つ日ぞ水槽樹の
まもよかりてみちや一味の雨露を
ぞきて極楽の色をつらひ落て
彼をむまるにあらんこと
乃至教ふ百八煩悩乃教ハ百
八煩悩を以て教珠乃首明の鐘
ひびきに神楽の笛ハ

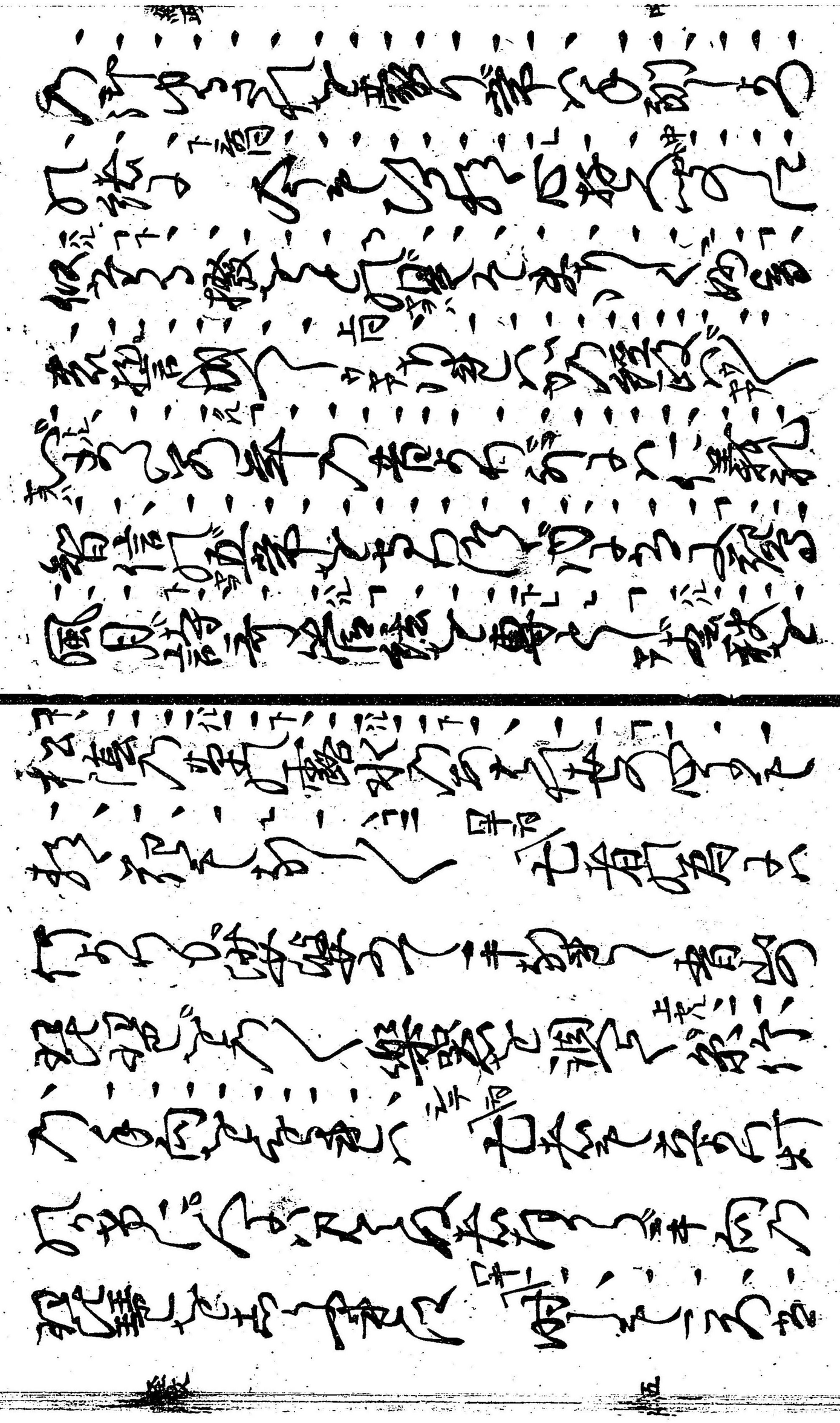
りまそへ彼も我もとて仏前にまよひ盃
管絃講にて男も女もの事にて
作ること役者を集め給ひ宮や一樹の陰
よやうり一河の流を汲むことを皆是
他生の縁とかやきゝても多年の値
遇めくるともさらにかたくもかなしける
くさ宮中にて法事をなすてよし

うる年の経段成仏正覚と弔給ふ有
難さよ　こゝに又彼者山を志ひを志く
亡者の為に手向つ詞も衆行れ念
を仏事をもて玄うゝ功を修て法流
門まう蹟の首をなかなみしやくかと
拈すてかねて彼をうましそ天の雨月多年ゆて
てうゝをい百歳の夜の霜のつかさのめをしやと

うらてゝ俤はなれぬ陰露乃身
きゝ分きゝ乃ふる雨の袖はぬれ
ぬ　　ロキセル　不思議やなにや深ゝなる
まゝ　　ロキセル　ゆ思ふ　ぞりけり
りの歌のおもふ　　ロキセル　ぞりけり
いろ人ゝてまゝ海とて　　シテ　秋経政
幾霊おろ沖乃有明さゝぬ

点あらはれ　　ロキセル　ゝて経政乃
幾夏と春ふ　　ロキセル　ゝ
消とゝ　　シテ　ゝて　　シテ　ゝ
絶のふく　　ロキ　まゝ　　ロキ　ゝ
けゝ　　シテ　ゝ　　シテ　ゝ
なるう　　ロキ　なさう　　シテ　蜻蛉乃　　シテ　上ロ　まゝ　　ロキ
乃ぞ　　ロキ　ゝて経政のゝ





夜ハ楽ぞ有りてさも面白き折節に　シテ詞

きや晴つる空かき曇り俄に降り来る

雨の音　ワキ詞　しきりに草木を払ひつ

時のてうしをいかにせん　シテ　いや雨にて

なかりけりあれ御覧ぜよ空に澄む雲風の

上同　月にかゝりし岡の松の枝の風ハ吹落

て村雨の音くまなく降りけるや

折からなりけり大絃ハさうさうとして村

雨の如し小絃ハ切々として

さゝめごとに似たり第一第二の

絃ハ索々として秋の風松を払って

疎韻落つ第三第四の絃ハ冷々として

夜の鶴の子を思って籠の中に鳴く

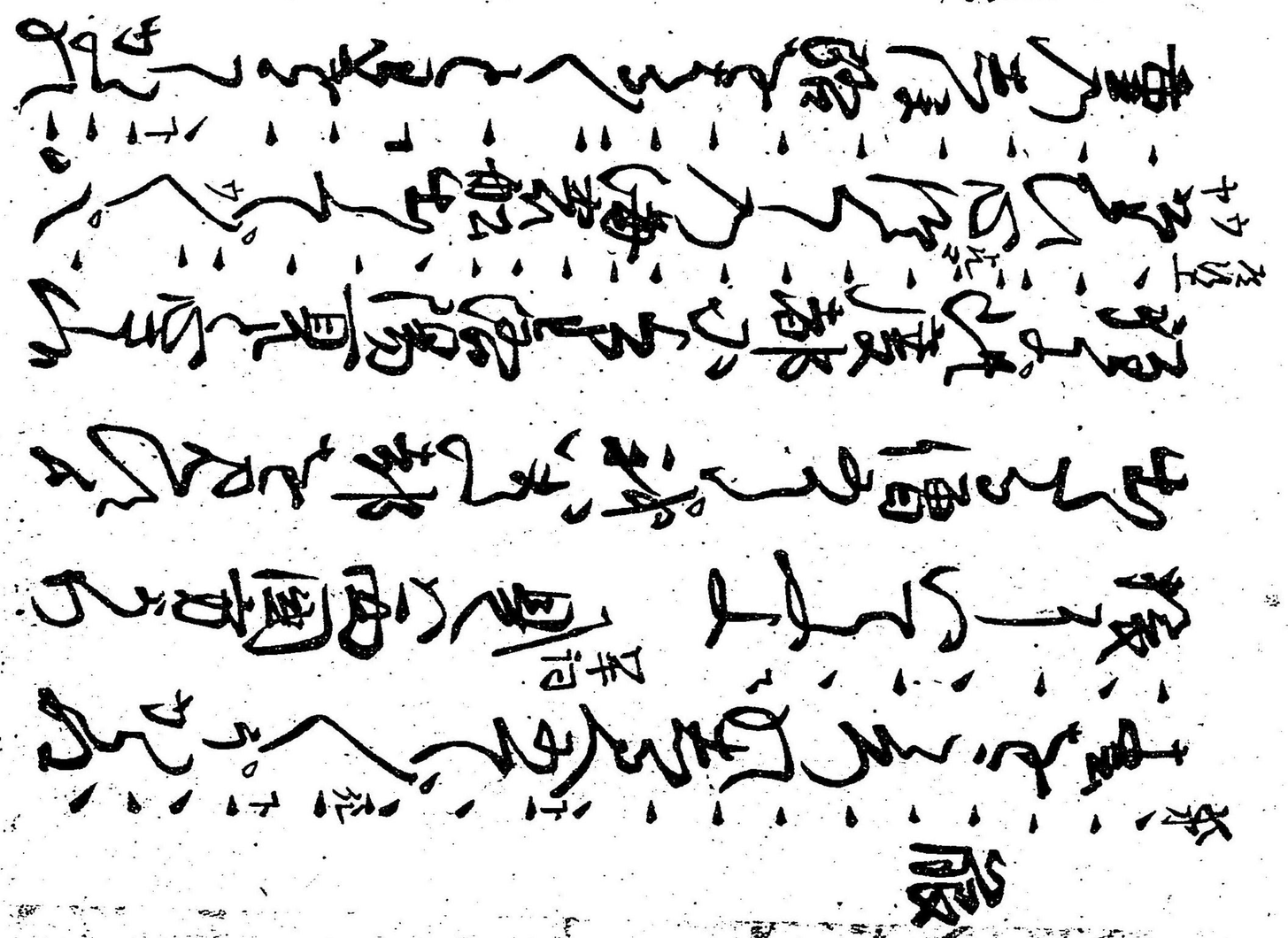
鶏も心して夜遊の[illegible]

やまめよ　一声の鳳管、秋琴の
雲ぢうこがき風風に見しめて楷
行よりひろうてぞ孫ぐ
舞あそべる律呂の音の聲
よもの拝あやまるすもむ
とをの舞のそて宴笑を色うと
きぐろの夜遊やつかまり乃

お遊やつかる乃夜遊屋
あ屋ちりやた
よかそりぐ乃ぐ
臙表乃せつ乃ぐ
ぐ人歌乃ぐ
高さりや武ぐ
やつ乃ぐ

ともし火を背けてはやがてあはれ
む深夜の月もさそはれたるや帝釈
羅刹がつかひは実をもちて眼光
猛火なる雨とあられにつれいかなる
修羅きハ地をもまた我と共ぞきる
あゝあなたもハかなきに猛火となりぬをもて
やく苦患をのがれんよしもがな

あれうもしひをかゝげさしまきやがちらかに見
人あやしむ荒れたるをさそひてや
嵐と共に燈であらしとぞなかなかに
を吹きて世をもれる魄霊は失
にもり魄灵のあはれなる世をなる深

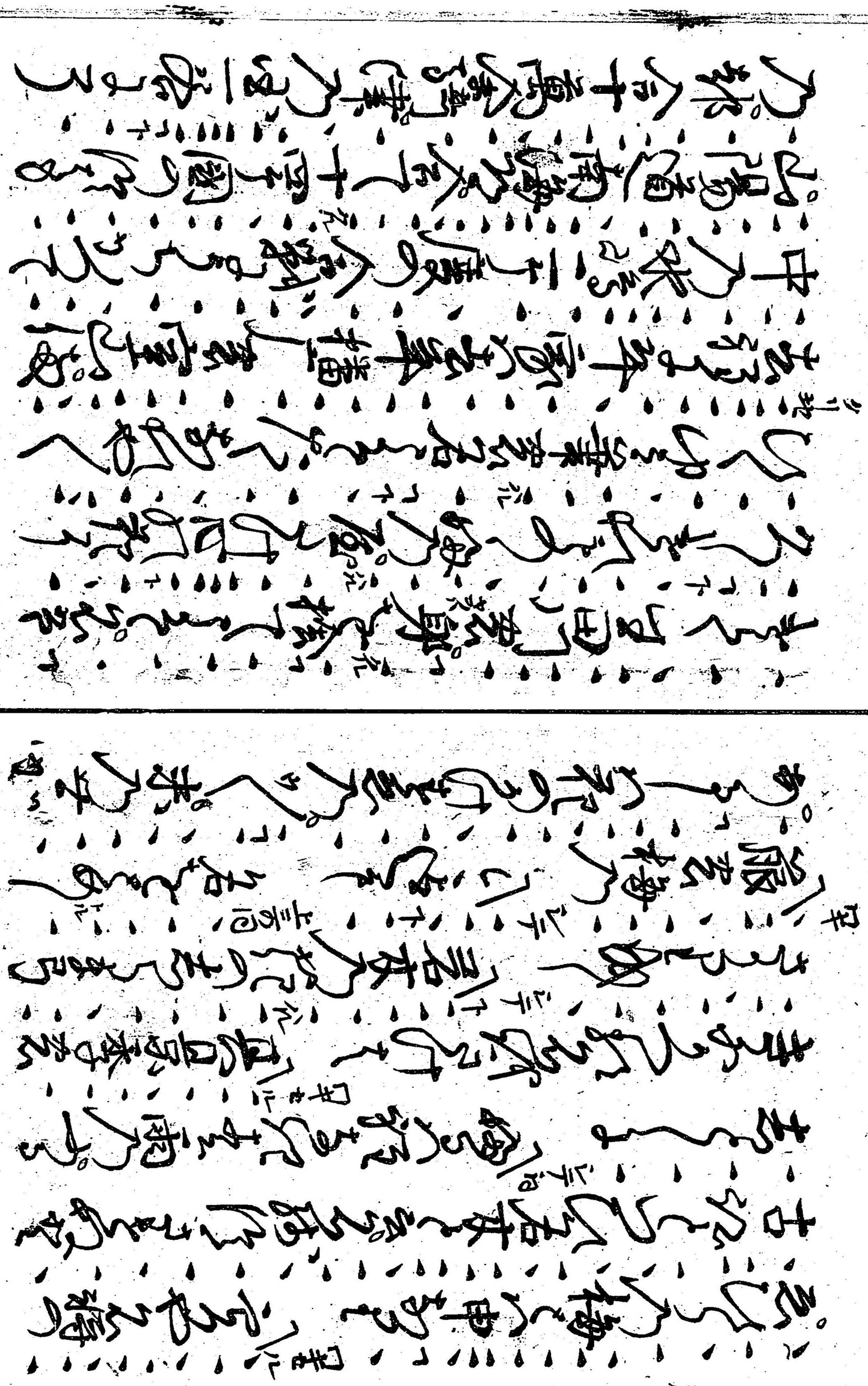


雲乃波かけても尽くし松原の星の光もさえ
須磨の浦らの里男は暮らし
或る年の夜の生死くるれてまさ
月日られ散花落葉無常は文常住
不滅の第一なし一色一香の無き辺は
むし中道の眼は悲しと人間もえを
の観念ぞ枝以来りかゝてあらむやあら

身命やらか人間有為の轉変はそれそれ
中に顯られて南浮は序る忘執のつく
其つきかの海なれやせ生死の苦しく
誉まもく夢のさまる未さし罪障
我乃行はかあうそも終は多
苦さらか海くゝはまよふをゆ
のかの思ひ成梅花ゆ求み〻いかさんか

見くへ云ひ[illegible]の梅と申ハ[illegible]
や藤ノ[illegible]ものばかりなれ[illegible]
てぞ[illegible]（シテ）いや君[illegible]事[illegible]
ぞ[illegible]ものとたる異[illegible]
よ[illegible]（ワキ）[illegible]
[illegible]ハ[illegible]（シテ）[illegible]
[illegible]年家十萬[illegible]

[illegible]梅原平[illegible]景時同[illegible]
源[illegible]景[illegible]梅花ノ者を
一枝[illegible]藤[illegible]
[illegible]
高名人[illegible]景[illegible]
[illegible]（トカル）[illegible]
[illegible]（上）[illegible]
[illegible]



旅宿なる　東ハ生田の森西ハ一谷を
かまへつゝ其あひ三里の程ハみちく
たて浦〳〵にハ数千艘の船をうかへ陸
にハ赤旗つらねをたてならへ風になびき
き天にひるかへる有様ハ大雲靉靆
としてあり　誠にして城郭前を
海際ハ山たかく須广なハ明石のやしろかく

あし行かたのうらわの千鳥も数多く
なりし時しも如月上旬の事なれハ
も須磨の若木の桜もまつ咲のうら落
雪と見えさえかつちる浪家評よ生田の森の
作りさかりを得たりかつ咲ひらくるむめ
の花一枝を手折りさしてハ天下をしつめし軍
乃門出をいはふよ心の花も手にとりけめ去

ほとゝぎす時ハ万人聞ケとて二手に
ハ三手に軍頼義ハ海ハ海
山ハ山ハ須ハ雲ハ雲ハ
行ハ行ハ鯨鶴翼ハ
月ハ雲ハ山ハ松ハ
乃ハ乃ハ行ハ海ハ
雲ハ翔ハ雲ハ

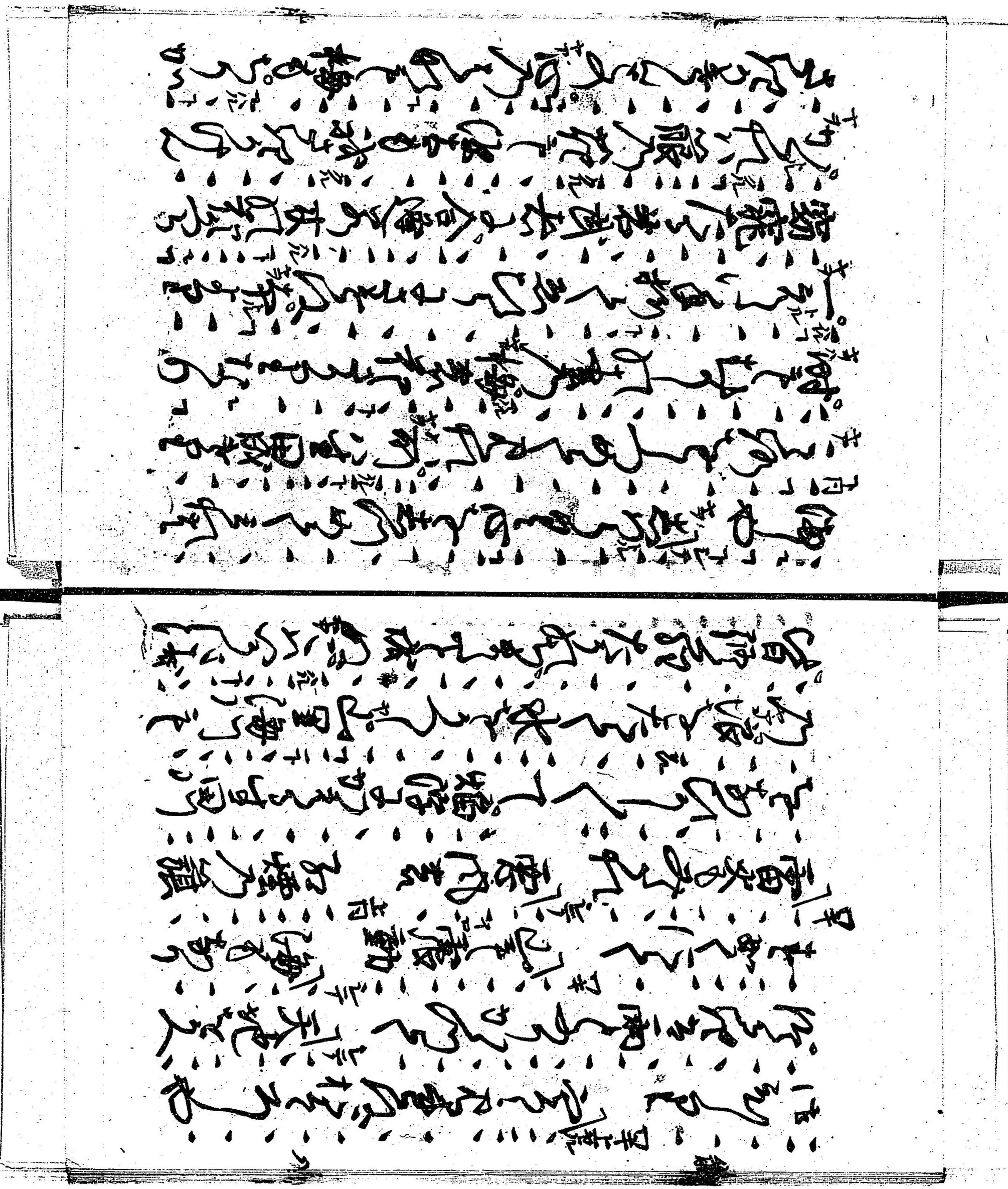
くハ船ハ浦ハ海ハ
源ハ船ハ歌ハ
ハハ須ハ須ハ
野ハ山ハ船ハ
海ハ船ハ
人ハ梅ハ紀ハ
宿ハ船ハ白雲ハ

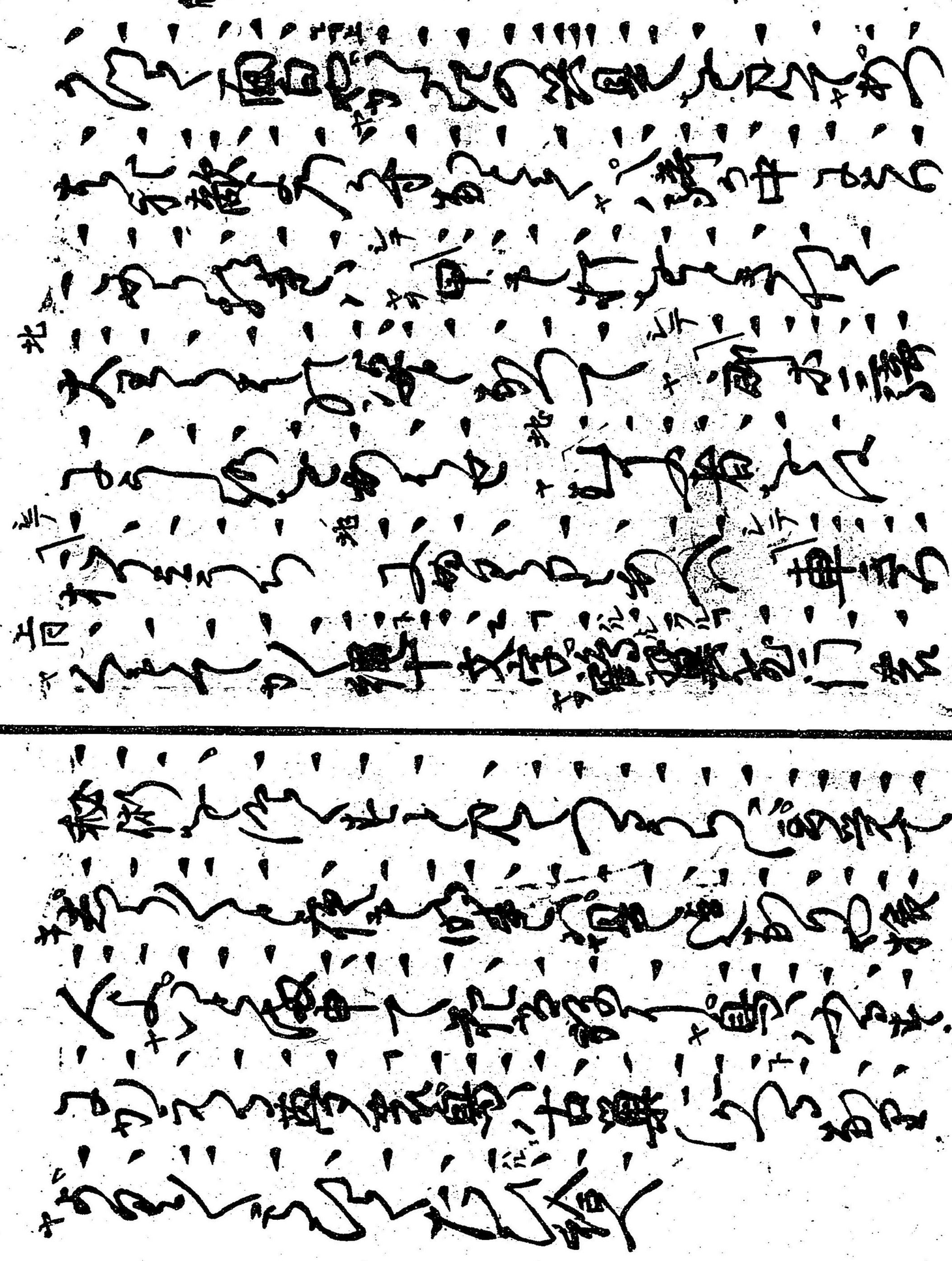
花乃ありし思ひ出の下の物語
上句
月の雲りあるとたとへ
今宵
今宵
此夕月影乃
乃 其景色うつる幽美あり
身世
縁あり
一樹乃陰の和れそんよ
鶯宿梅乃末
いよ宿と絵に描く

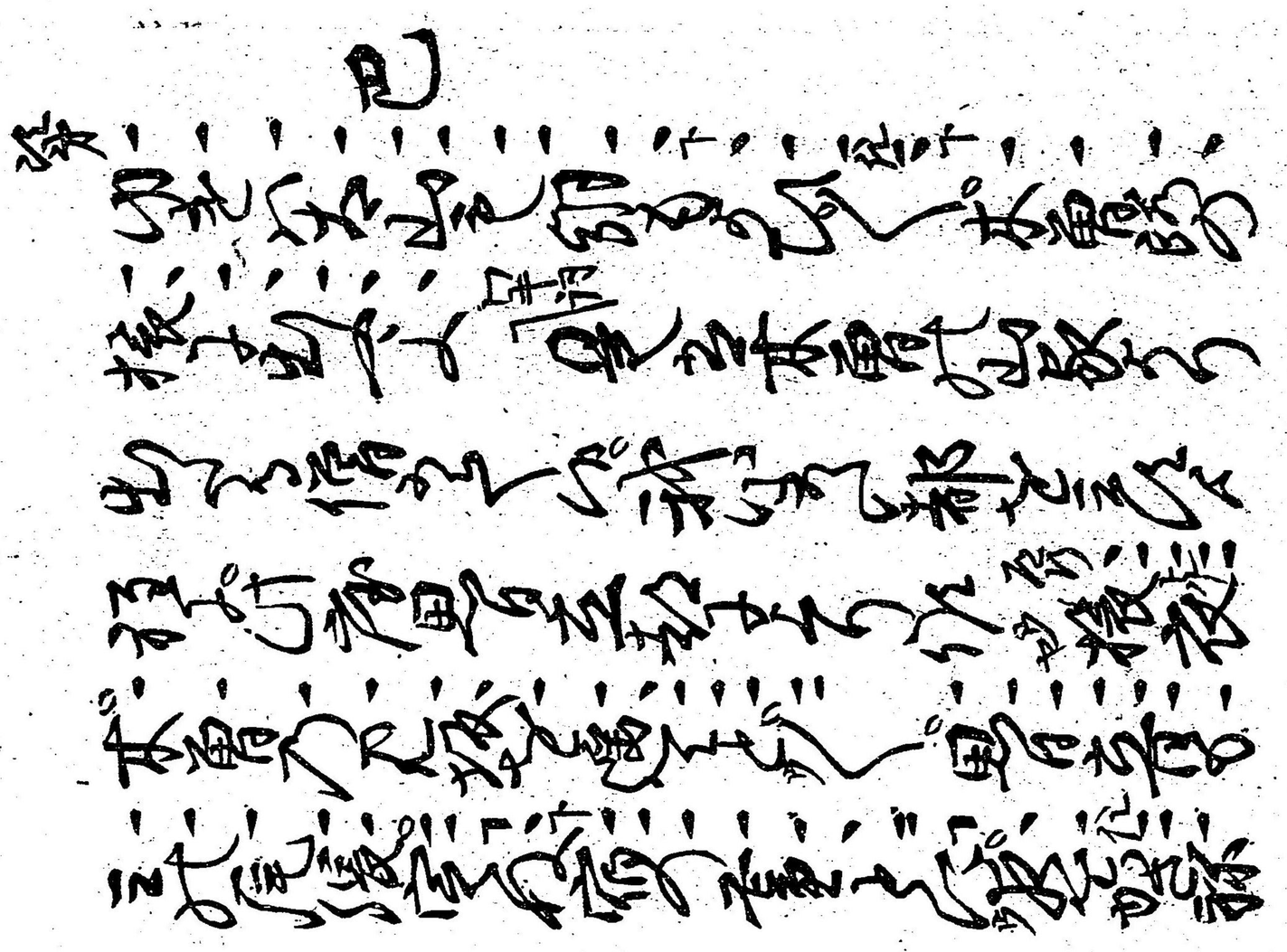
世そうなひと
移ひ
花ひ
うきにきりし
和うてそよけれ
早上句
しくもあ
乃哀をもつ
ゆくまた生
夢すれ
華乃末陰よ
かきもく
魂そ
陽よ
陰り
執ひ
いの
俗乃志
執ひ
生

さながら血は涿鹿乃河となつて　紅波
たてをながし　白刃骨をくだく
弓はり月もるひやて剣の影うや
ぢやう屋のむくせを眼もあらう心を乱
まよふ修羅道乃とかなしてゆる給へよ
思風やおそひて扱ひまの若武者乃箙
の梅花のえだのさかりを花やかに

給へやとてうめり入るとみえしが　今を
何とする身の世をたのしむ縁遠まよ他
生れての一樹の陰より夢中乃對面向
影を尋ねる人の為たへかけよ縁を
ゆえとやすらひ魂ようのまてき
夢なるを知りて給へとてまぬれも
ぞ夜もあけがたの空につげあやかれ御跡弔ひ給へよ







作日とそへて行かれる石路
や鳴門海とは目かけてよく見渡す
江の川栗津の原をやしなひて見てゐたる
所よ稲作りやうやうと思ひ作り面白や
みほの浦波おもなく栗津の
松陰よ神とやまつりたる宮神
願を頼むや

思儀やお

うなる女性の神ぞまつりなくそ
を祭り給事ぞひたくそこ
考しよう作
事を作りうしし作神とまり願
を流し給ふ事を宮中てい
おろと宮殿給やつくまく
行教と言ふ作八幡

まつ[illegible]一貫の寺よりいそぎ行
[illegible]ぬまの[illegible]とい[illegible]ぬ[illegible]が的
[illegible]けまに流てほろ〳〵おれる泳
し給ふ[illegible]神[illegible]し氣[illegible]や思[illegible]を
むし[illegible]衣の孩[illegible]四歌[illegible]れ
より都男山[illegible]を志[illegible]国
[illegible]を守り給ふ[illegible]ろ〳〵と[illegible]審給

[illegible]や[illegible]やゐ住る[illegible]星
の[illegible]色[illegible]皮[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]やり[illegible]
[illegible]前[illegible]の[illegible]
国木[illegible]の山家の[illegible]木[illegible]の
山家の人[illegible]民[illegible]栗津[illegible]
[illegible]ごと[illegible]

社号を信濃守義仲乃出来
れば、神と云ふ事や
猿人よ　思ひやる義仲が非
常なる事此可
種さと神おもひ向ひまとつて
古へ乃昔より君よりうへ
なる月日より仲乃佛と祝ひ

ひ、宮殿をつ
猿人乃一樹乃木を他まの縁と拾
ひ、此松ねよ猿居し所ぞ
経を讀誦し、五重塔を建
給ふ、宮殿寺に値遇の女
き値遇、去ほ言て行ぬ
乃鐘乃撞乃鐘乃響

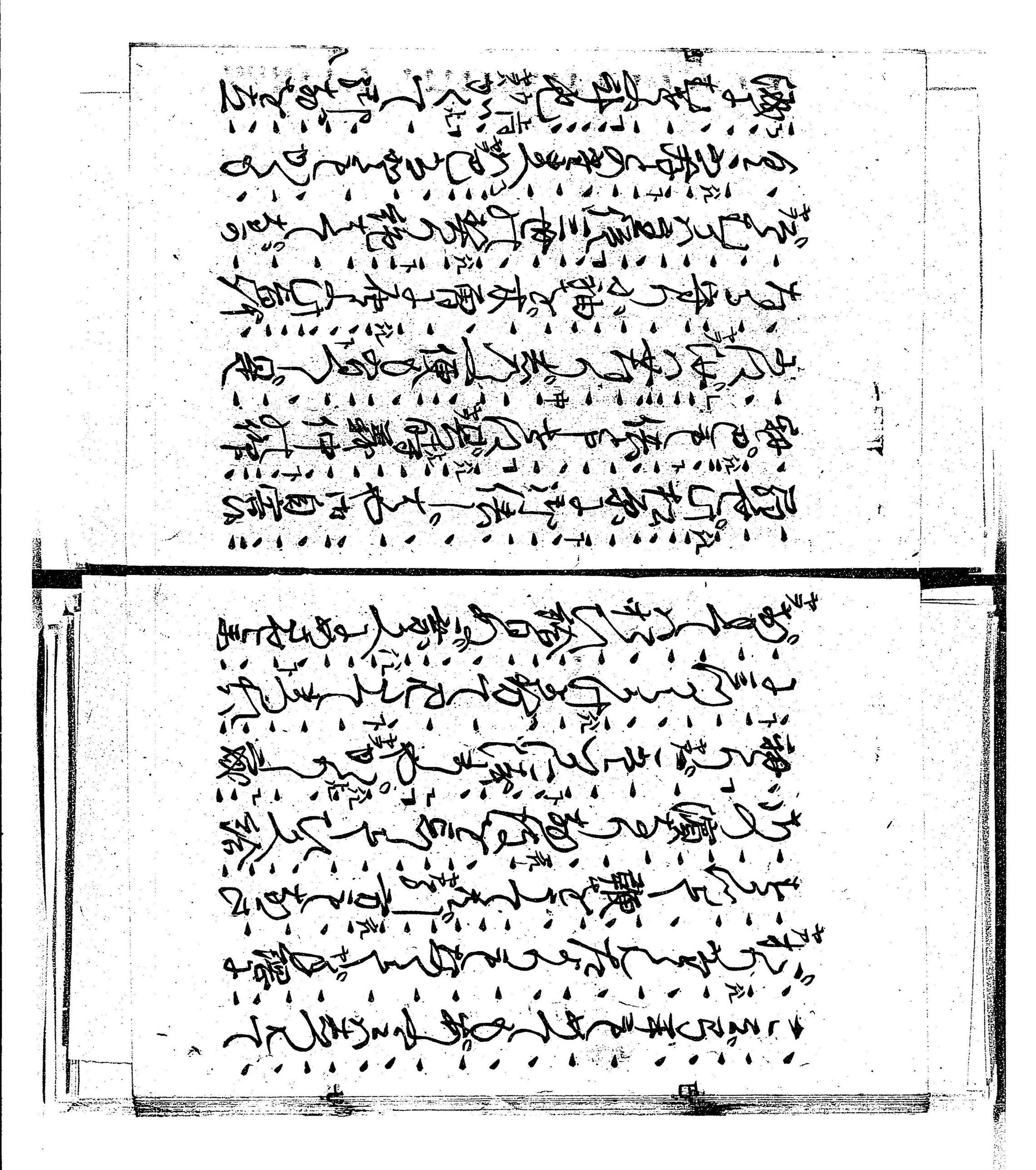
ちぎりつゝ深きもあさきこき折節に
我もむかしの身なりし其かゆかしき
ごともぢらばれ世の人へみとらせ給へ
ゆかしき花の草風に散るかよそうく
露もかくしくなき根々く日も暮ぬ
みしめしうく粟津の原の長き世の友
きうかいたや弔らはむく洛記

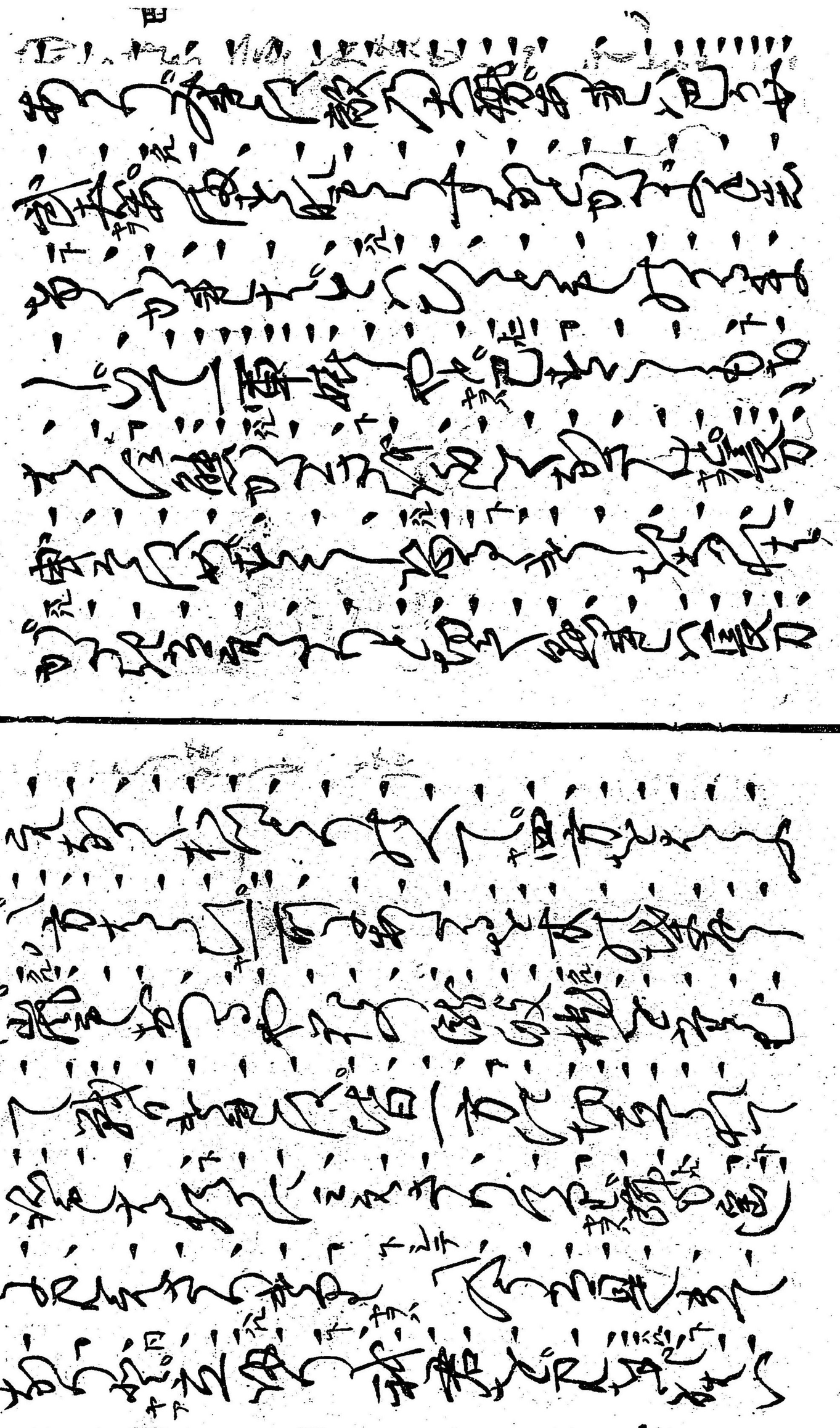
むまりきこまてまつる信心を立て祈ろ
このうきもあはらうさまらう往けん
羅も報も因果の程らばはうがま
むかし法の功力に草木国土も成仏
すれば況んやあらふ直道の弔らひ
ば見を行きもしたりやくいう有
かうや思ひやあか粟津の原の字

[illegible]つ[illegible]ぬ[illegible]甲冑
を帝[illegible]きけりよ　中[illegible]と
云[illegible]武者[illegible]て[illegible]ばらせ[illegible]
[illegible]れん　[illegible]
[illegible]君[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]信申[illegible]
[illegible]
[illegible]恩[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]義仲[illegible]
[illegible]五萬[illegible]

秋きあらしの山やまおろしの声
乃合戦よりひく捕高名者
喜多郎那小面とこれ誰しぞ振
ひのもとにあるかぎりの男心
の那上にて引きもこらず時の乃動く軍
きらびやかなりしかるに
栗津野の草に露置きそえ除
可ち宮ず古傳を同可ぬ人ちれも
順えしよりそもそも義やうけ屋
乃人郷みこ上ぶ屋絵り義仲乃
家なをかりまもこ上ぶ川
代宮ものまの雲に月
くがひちと所をそ上て詠を考る
神ふ音行ぶ秋ぬ田よう





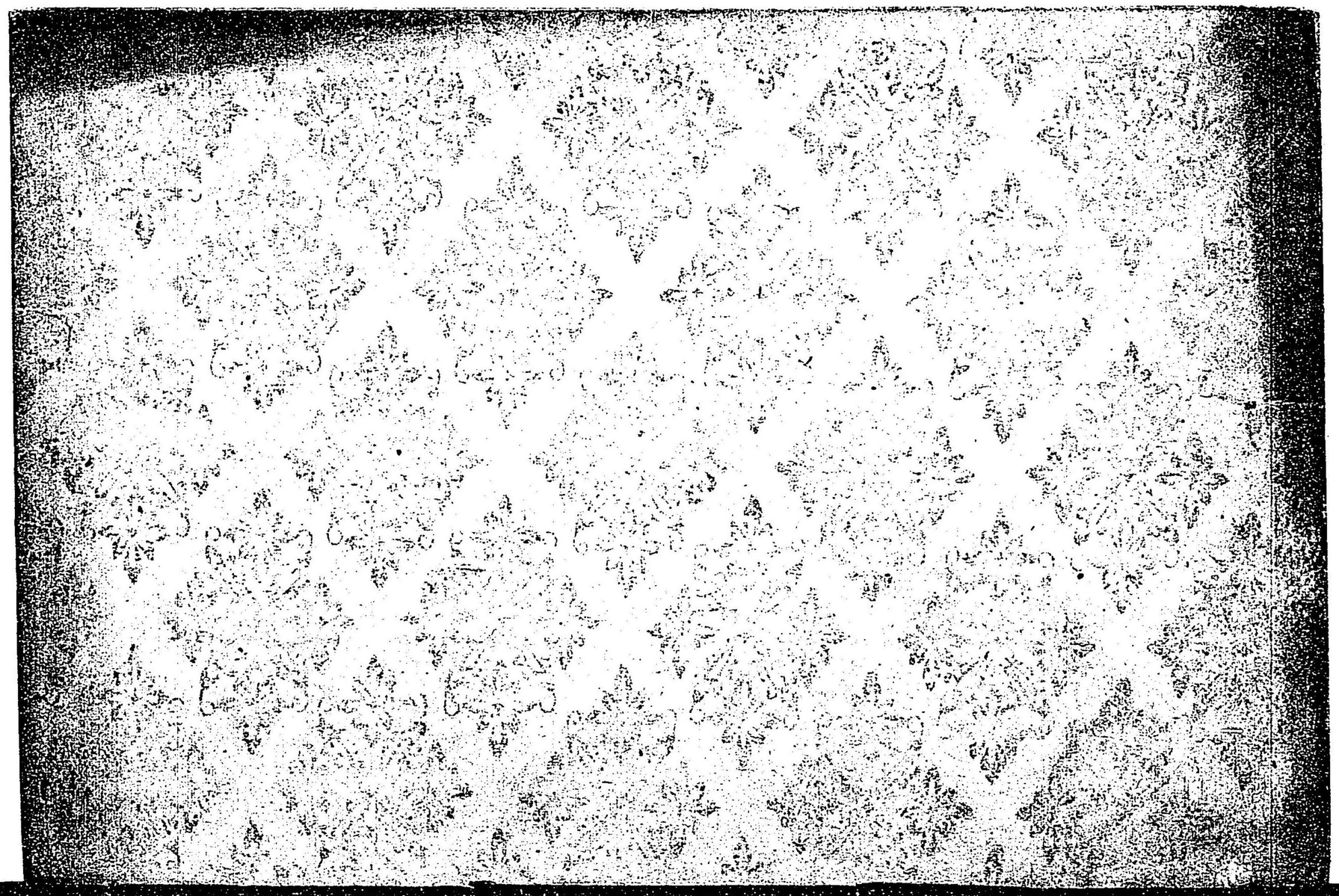
たりやだやうに自宮ひとりぼつ松の
子よりなほ日は枝ぶりほうよう御小袖
だらけ守りを書きたる給
思ふ死騒よりは行やるか
書わけやうの君付名をしてはとぢ
り思へどもこれ世を忍ぶ
しまて栗津乃ぶ行よりうに常切

如何心好不既とまりもろ
同じくこわ御小袖
引うさぞのきもとぬぬ
右月衣引有宿ぬ
こまるたまを水曹ぬとに
嫌ともへを言ひ高行
うしろめたさの勅恋をひとに

十終

拾人考ましてかくしたる

右之本者觀世太夫織部
章句眞本令版行畢
正德六丙申歲弥生
天保十一庚子歲孟春改正再板
皇都二条通御幸町西江入町
山本長兵

明治十七年九月廿日翻刻御届
同　年十月十八日　刻成發兌

翻刻人　京都府平民　寺田熊次郎
下京區第五組麩屋町
錦小路上ル梅屋町十三番戸